

## II. 文化人類学からのアプローチ

### 宇宙への進出に関する人文科学的アプローチの検討

岡田 浩樹\*

A study on the humanistic approach for space exploration

by

Hiroki OKADA (Kobe University)

**Abstract:** The purpose of this study is to consider the implications we can draw from the application of the view from Cultural Anthropology to space study. In other words, this paper provides consideration to exploring the possibility of “Space Anthropology”. In general, Cultural Anthropologists have been concerned in their study with human being life, like as “primitive societies”, but today they become to deal with modern society in the process of modernization and globalization. Although it is beyond the scope of this paper to illustrate all subject of space anthropology, I hope to make clear why I think Cultural Anthropology, originally proposed in the field of society on the earth, is has validity on space exploration, which is the new filed for human beings. Before I show how cultural anthropology can be applied to space field, it is useful to discuss the relationship between space exploration of human beings and modernization and globalization. It is important to consider the cultural background of the relationship and note the similarity both as expansion of the *Lebenswelt* of human beings. Based on the above perspective, I suggest there approaches to subjects of space anthropology, that is, “extension of *Lebenswelt*”, “reorganization of *Lebenswelt*” and “invention of *Lebenswelt*”. After illustrating some topics of space anthropology, and I consider for a moment in the connection the influence of Tourism and Space trip form cultural anthropology.

**Keywords:** 宇宙探査, 人文科学, 文化人類学, 宇宙人類学, 近代化, グローバリゼーション, 宇宙観光

#### 概要

本論文は人類の宇宙への進出について人文科学的なアプローチを行う意義について検討する。まず宇宙への進出が人文科学の学問分野において、新しいフィールドとトピックをもたらすことを議論する。ついで、生活世界の概念を手がかりに、近現代に人類が経験してきた近代化およびグローバリゼーションと宇宙開発の関係について言及した後に人文科学が宇宙への進出に接近する際の3つのアプローチと時間軸、空間軸の問題について検討する。その上で、文化人類学の研究史と宇宙研究の関連について述べ、「宇宙人類学」が取り扱うことのできるトピックを列挙する。そして最後に、そうしたトピックの一つの事例として観光人類学の観点から宇宙観光することの問題を議論し、宇宙開発、宇宙への進出について文化人類学さらに人文科学からの接近の有効性を示す。

---

\* 神戸大学大学院国際文化学研究科 教授

## 1. はじめに

人類の宇宙への進出は、私たちに思想、価値観、生活、社会などすべての面において、大きな変化をもたらす可能性がある。この事については、研究者に限らず多くの者が賛同するであろう。本論文の目的は、人類の宇宙への進出がもたらす変化について「人類文化の新しい可能性」の問題として捉え、これを文化人類学の観点から検討することにある。

これまで「宇宙」は、古代の思想家は別として、近代以降は科学者が主に研究の対象としてきた領域であり続けた事は、疑いもない。近代的な学問が成立する際に、「科学と宗教」の分離が起き、それ以前の民俗社会や神学がもっていた「世界観」「宇宙観」に科学的宇宙論が取って代わるにいたった。一方で人文科学は、「宇宙」から切り離された「世界」に対し実証的にアプローチすることで、客観的な学問分野としての基盤を築いてきたのである。ただし、この場合の「世界」とは、あくまでも人間が生活の場として直接に体験しうる知覚的経験の世界、いわゆる「生活世界」(*Lebenswelt*)に限定されてきたと言えよう。

現象学の先駆者であるフッサールによれば、「生活世界」とはすべての人間に自明のものであり、その型式に関しても経験によってなじまれている世界の事であり、私たちが今、ここで生きている「世界」のことである<sup>1</sup>。フッサールは、ここから科学の根源的基盤も、この「生活世界」にあるとし、科学的絶対客観主義に対する批判に向かうのであるが、本論ではこれについては深入りをしないでおく。

ここで強調しておきたいのは、「宇宙」についての近代科学研究が成立する過程において、民族的・宗教的宇宙観においては連続していた「宇宙」と「生活世界」が分離した事である。古代においては「宇宙」は「原初的混沌状態(カオス)」から移行した「秩序ある状態」を意味するとされ、哲学的あるいは宗教的な意味での宇宙観が成立していた。また古代ギリシアその他の古代文明に見られたのは、宇宙を構成する元素に関する議論であり、この議論は近代の科学的宇宙構造論を経て、現在の天文学、宇宙物理学につながっている<sup>2</sup>。ただし古代の宇宙観と近代科学の間には決定的な切断がある。つまり、近代の科学的宇宙構造論においては、宇宙は「秩序ある状態」をア・プリオリに前提としていない。宇宙は今後ア・ポストリオリに解明すべき対象なのである。

したがって「宇宙」は科学者が研究する「未知の領域」であり、科学的知見を豊かにもたらすフィールドではあるものの、それは人間にとってもはや自明でもなく、直接に経験することができない非「生活世界」となった。一方、近代人文科学は「科学」としての基盤を構築するために、「生活世界」を実証的に研究すること、すなわちすべてを事実に還元し、そこから経験的・帰納的に普遍法則を見いだすことを試みてきた。これはいわば疑似科学的アプローチと言えるのであり、その視野からは「宇宙」は脱落することになる。

本論文では、人文科学的研究から「脱落」した「宇宙」をふたたび、その視野に収める必要性について検討する。本格的な宇宙開発時代を迎えようとしている今日、「宇宙」はふたたび人文科学的研究にとって重要な対象となっていること、そしてまた豊かな思考をもたらす新しいフィールドであることを、文化人類学の視点から検討する。宇宙開発が今後、人類

の「生活世界」の拡大をもたらすならば、それは宇宙に対する人文科学的知見は、文化や社会の要請に大きな影響を受ける科学技術の発展においても重要であると思われる。

本論文と同じ視点で人類の宇宙への進出を検討した研究として、「宇宙への進出は人類に何をもたらすか」という木下富雄の先駆的な論文がある<sup>3</sup>。

人類の発展の歴史を俯瞰すると、世界の時間的・空間的な広がり、人間の思想や社会形態を含めて、その存在のありかたに大きな影響を与えたことが看取され、この時間的・空間的広がり最たるものが宇宙への進出であると木下は言う<sup>4</sup>。歴史の発展過程は単線的でなく、非線形な発展が多く見られ、例えば大航海時代の到来や新大陸の発見などのイベントが「異世界」への興奮をもたらしてきた。思想や芸術に飛躍的な進歩をもたらしてきた。人類の宇宙進出は人類の進化における最大のジャンプといえるかもしれない。こうした認識は本論文と共通するものである。

また、木下が検討した「現時点で私たちが宇宙空間に進出したときに影響を受けるであろう問題点」は今後検討せねばならない具体的な課題を示している。すなわち、知覚の基準系変化の問題、宇宙空間がもたらす価値の相対化の問題、重力の変化がもたらす社会的ルールや規範の変化の問題、さらには宗教世界や人間の意味論的な問題などの問題提起は、本論文の議論と密接な関係がある。

ただし、本論文と木下の論考の相違点は、大きく分けて 2 点ある。第一に、木下の論考は心理学の観点から議論が進められ、個々の人間の認識や感情、価値観、思考に焦点が当てられ、そこから議論を発展させている。これに対し、本論文では、文化や社会現象など、これまでの文化人類学、社会学の知見を基盤に個人を越えた文化のダイナミズムや社会システムの観点から検討する。したがって、木下の論考と本論文は相補的な関係にある。第二に、木下の論考は、宇宙進出に伴ってもたらされる新しい局面を想定し、議論を進めているのに対し、本論文では、近代そしてグローバリゼーションといった今日の状況を基盤に、宇宙への進出が行われると見なし、そこで起きる問題の連続性と非連続性に着目する。ただし、こうしたアプローチの違いは、どちらに妥当性があるというものではない。人文諸科学にとって「宇宙」は多様な課題を提供し、基礎研究から応用研究まで幅広く、豊かなフィールドであり、未だその研究の端緒についたばかりである。本論文も今後さまざまな分野や視点で展開されるべき問題のごく一部を取り扱ったに過ぎないことを強調しておきたい。

## 2. 拡大する生活世界と「宇宙」

人類の歴史において、「生活世界」の枠組みは不変ではない。人類の歴史は、知覚的経験の世界である「生活世界」が人々の実際の生活領域を越え、拡大し続けた歴史でもある。特に近代化の過程では、人々の生活世界が共同体の枠組みを超え、「社会」や「国家」に拡大した。この時期に、近代的な「社会学」や「政治学」が成立し、また大航海時代を経て、近代に至ると地球上の多様な社会についての関心が共有され、多様な文化に関する知識が蓄積されるとともに「文化人類学」が成立した。このような「生活世界」の拡大が、それまでの思想、価値観、生活、社会、そして文化を大きく変化させた。

そして今日、近代化の進展、特に市場経済が世界を覆うにつれて、私たちは「グローバリゼーション」という歴史的転換に直面していると言われる。「グローバリゼーション」は「地球化」「世界化」とも訳されることがあり、私たちの「生活世界」が地球規模に広がった、というよりも「広げさせられている」。一方で、グローバリゼーションによって急速に拡大した「生活世界」はもはやすべての人々にとって自明なものでなくなり、なじみがある世界でもなくなってきている。

こうした今日の状況において、再び「宇宙」は人文科学の検討すべき対象になったというのが本論文の出発点である。今日のグローバリゼーションを考える上で、「宇宙」はもはや私たちの「生活世界」と切り離された存在ではない。

そもそも学問の世界において人文科学の分野の対象として切り離された「宇宙」であるが、近代以前（そして今日でも）人類は天体を含む宇宙空間の観察に基づいて、農業や航海、日常生活を秩序づける暦法、さらには占いにいたるまで、自らの活動に利用してきた。また宇宙は文学や芸術の分野に様々なインスピレーションを与えてきたのである。それが 20 世紀を通してまた宇宙との具体的な関わりを持つようになり、今日宇宙自体を自らの活動の場としつつある段階と言えよう。

二十世紀においてすでに宇宙開発は「探査」から開発利用段階への段階に入った。その過程では、社会・文化との密接な関係が当初から存在した。まず第二次世界大戦中に兵器として開発されたドイツの V1 号、V2 号ロケットが宇宙ロケットに転用され、1961 年に旧ソビエト連邦のガガーリン少佐が人類初の有人宇宙飛行に成功する。

その後、宇宙開発が飛躍的に発展した背景には第二次世界大戦後に、それぞれアメリカ合衆国とソビエト連邦を中心とした東西の国家群の対立、いわゆる冷戦構造があった。有人ロケットによる月面探査は、米ソの国家的威信をかけた宇宙開発競争の産物の一つであると言っても過言ではない。したがって、1969 年にアメリカのアポロ 11 号が月面着陸に成功すると、有人ロケットによる探査は一つの区切りを迎える。

その後、月や火星などの太陽系内惑星は無人ロケットによって探査し、地球周辺の有人宇宙ステーションの打ち上げと維持（宇宙滞在期間）が、次の段階における宇宙開発競争の焦点となった。旧ソ連の有人宇宙ステーションである「ソユーズ」、アメリカのスカイラブとスペースラブ（軌道上実験室）、そしてスペースシャトルの運行である。この時期は 1960

年代までの宇宙開発競争が未知なる地球外の天体にいかに早く到達するかという「探査」競争であったのに対し、有人宇宙ステーションを利用した「開発・利用段階」に移行したことを示している<sup>5</sup>。この過程で、宇宙衛星通信、宇宙空間からのリモートナビゲーション技術が生み出され、携帯電話、ナビゲーションシステムなど GPS（全地球測位システム）、衛星を利用した情報通信システムなど、現在の私たちの生活にも大きな影響を与えた技術が開発され、利用されるようになった。

2011年のスペースシャトルの運用停止は、もはや「有人」であること、それ自体が重要な「探査」ではなく、コスト面や開発・利用においてもっとも有効な方法を選択する時期に至ったと見ることもできよう。しかし、一方で、国家の威信をかけた宇宙開発から、経済的側面、あるいは直接的な軍事手段に関わる政治的側面、さらには「はやぶさ」に見られるように、「国家の威信」というより、市民にいかに受け入れられるかが、宇宙開発に大きな影響を与えるようになったとも言える。

さらに重要な点は、今日の宇宙開発技術の方向性が、グローバリゼーションに大きな影響を与えるだけでなく、グローバリゼーションに至る社会・文化的運動の延長上にあるという点である。

衛星テレビ放送によって、世界各地の情報をリアルタイムで見ることができるようになり、携帯電話やメールなどの利用等、現在の世界の変化に大きな影響を与えつつある。「アラブの春」がもっとも劇的な例であるが、宇宙開発がもたらした技術革新が、コミュニケーションの様式、社会関係のあり方、さらには国家そのものを揺るがす事態に至っている。今日起きているグローバリゼーションを議論する際に、宇宙開発技術がもたらしたモノやシステムが大きな影響をもつ。一方で、より便利なシステムやモノを求める人々の欲望がさらなる技術革新を要請し、これに促されて宇宙開発が進展する可能性がある。

すなわち、人々がその活動を拡大させるために技術革新を促し、技術革新の結果、さらなる活動領域の拡大、そして「生活世界」の拡大が起きていると言えよう。ただし、この現象は決して新しいものでない。十九世紀の産業革命の後、技術革新による交通通信手段の発達には、国境を越えた人間活動の拡大をもたらした。宇宙技術の発展はその延長上にあり、その技術によって国境を越えた人間活動のさらなる拡大がもたらされると同時に、その一部が（といってもごく少数にとどまるが）地球の範囲を超えて活動するようになったと言えよう。

ここに近代が内包している矛盾が、グローバリゼーションにおいても再現される可能性がある。近代の政治経済システムに応じて形成された国民国家は、同じく近代の技術革新によって、その国境を越えて移動する移民や移住者をもたらした。つまり近代は「国家」の存立を要請すると同時に、その範囲を超えていく存在も同時に生み出した。今日のグローバリゼーションは、人々がさらに国境を越えて移動しコミュニケーションを図ることを可能にした。一方でこうした移動やコミュニケーションに大きく寄与した技術開発の基盤となった宇宙開発は、いまだ大きく近代の国民国家に依存しており、むしろ矛盾は深まりつつある。

グローバリゼーションとは、単に経済の諸活動が国境を越えて劇的に増大し、国家間の相



互依存が高くなっていることのみを意味しない。国民国家を枠組みとした社会・文化の領域が越境していき、NGO や企業活動など国民国家以外の役割が増大し、それらは国家を越えたネットワークを形成している。衛星通信技術を利用したテレビ放送や携帯電話による通話、インターネット、メールによる情報の獲得とコミュニケーションの拡大は、思想、情報、さらには社会的な活動や文化をほぼ再帰不可能な状況にいたらしめている。つまり宇宙技術はグローバリゼーションを支え、これを促進しているのであり、この事によって人々の生活世界は拡大すると共に、拡大した生活世界がさらなるグローバリゼーションを要請し、これを支える宇宙技術開発を求めると考えられる。

このように、グローバリゼーションが地球上を覆いつつある今日、宇宙開発に直接関わる、あるいは宇宙飛行士として宇宙に行かないまでも、私たちの生活世界に「宇宙」は密接な関わりを増しつつある。つまり、「宇宙」はもはや人々の生活世界と切り離された「未知の空間」ではない。そして「宇宙観光」など、すでに現実化しつつある一般の人々と宇宙との関わり、さらには、現在の宇宙開発の延長上として、資源獲得のための宇宙進出や宇宙産業の形成、「宇宙移住」といった問題を考える場合には、人文科学的なアプローチが有効であると考えられる。

### 3. 人文科学研究からの宇宙へのアプローチ

本論の出発点は、宇宙空間を想像すること、経験することは私たちの想像力の枠組みと限界を明らかにするという点で、人文科学研究の対象となりうるものであり、今日の私たちの社会・文化を相対化する大きな契機であるという認識である。そして「宇宙」についての人文科学的なアプローチには様々なトピックやテーマの可能性があり、それに応じた分野がそれぞれ、あるいは共同で研究を進めうるであろう。こうした新しい研究テーマは応用的分野と基礎的分野という区分もできるであろうが、ここでは「生活世界の延長」、「生活世界の改編」、「生活世界の創造」という3つのカテゴリーに区分してみたい。

まず、第一のカテゴリーとして「生活世界の延長」というテーマ群や関連分野については、現在諸分野が取り扱っているテーマの延長上に「宇宙」が設定される。主に社会科学系の分野および人文科学の中で「応用」がつく下位分野が、こうしたテーマを取り扱うことになる。宇宙観光や宇宙関連産業の振興が新しいビジネスを生み出すことから、経済学や経営学のテーマとなり得る。また、宇宙開発に関する国家戦略の問題や宇宙空間の「領有権」の問題は政治学や法学、国際関係研究の対象となる。いわゆる宇宙ガバナンスの問題である。また、宇宙開発によってもたらされる「地球」に対する知見は、いわゆる地域研究の拡大版として、環境問題や自然災害のリスク回避などの研究に有用であろう。その他、宇宙開発技術の副産物である高度な技術製品、さらには日常用品の開発なども考え得る。これらは現在の私たちの生活世界の延長上に要請される諸課題である。また倫理学の応用分野である「宇宙倫理学」なども、このカテゴリーに含まれる。

第二のカテゴリー「生活世界の改編」というテーマ群や関連分野は、比較的基礎的なテーマを取り扱う分野が取り扱うことになるであろう。これまでの人文科学の根本的問題を「宇宙」空間における生活世界の改編を手がかりに、現在の基本的問いやトピックを改めて問い直すことになる。すなわち、宇宙には「未知の領域」として現在の私たちの生活世界を拡大するだけでなく、生活世界そのものを根底から変えていくような変化をもたらす可能性がある。それは「生活世界」だけでなく、新しい世界観の構築であり、新しい価値観や新しい社会システム、新しい文化を生み出す可能性を秘めている。例えば、「人間とは何か」という人文科学の究極の問い、あるいは宗教研究における「超自然的存在」(神)の問題であり、宇宙から得られるインスピレーションによって生み出される新しい芸術や表現なども、このカテゴリーに入る。

第三のカテゴリーは、第一のカテゴリーと第二のカテゴリーの中間にあたると言えるであろう。これまでの人文科学の知見を応用しつつ、基礎的なテーマを検討する。これはいわば思考実験とも言える。例えば、宇宙コロニーを想定する場合、そこにどのような生活空間を造り上げるか、どのような社会システムを設定するか、など、一種の思考実験を行うものである。これについては、一つの分野だけでなく、歴史や社会、文化などを扱う複数の分野が共同で取り組むのが望ましいと思われる。従来、人文科学の一般的傾向として、実証主義的を重視する立場から、心理学などいくつかの分野において小規模の集団についての「実験」

が行われることはあっても、共同体や社会レベルで、どのような共同体や社会が「創造」しうるかは深く議論されることがなかった。実際の宇宙空間の居住について、一種のシミュレーションを行うという点で、第一のカテゴリーの研究テーマである。同時に、人類にとっていかなる共同体や社会が望ましいかという問題であり、社会の理想像を具体化するという点で、第二のカテゴリーに属するユートピア、イデオロギーの問題と言った根本的問題でもある。

これらの3つのカテゴリーの具体的問題を取り扱う際には、「現在」、あるいは今後の宇宙開発のどの時期にテーマを想定するかという時間軸の設定は明確に区分しなければならないであろう。例えば、第一のカテゴリーについて、現在の宇宙開発の状況、無人探査機による太陽系内での探査、そして地球軌道上の有人宇宙ステーションにおける少人数の滞在、大気圏境界付近までの「宇宙旅行」などの現状を踏まえ、宇宙観光などの宇宙関連産業、宇宙ガバナンスの問題などが議論される。しかし、本格的に地球外に人類が一定期間居住する段階では、資源開発などの宇宙関連産業の問題、さらには宇宙ガバナンスの問題も異なってくる。さらに太陽系外への宇宙進出や、もっと長い時間的スパン、例えば極端な設定では数万年から50億年後などの遠い未来を想定するかが問題となる。第二、第三のカテゴリーはこうした時間軸の設定がより重要になる。

加えて、空間軸の設定も区別が必要であろう。宇宙船の内部か、軌道上の宇宙ステーションにおいてか、あるいは地球外のスペースベース、あるいは宇宙コロニーか。さらには宇宙と地球との関係を議論するのか、宇宙進出にともなう地球の変化、地上の私たちの生活空間の変化を議論するのかなど、宇宙空間のどの場所においてトピックを設定するのかが重要な問題である。

ここでは宇宙に関する人文科学のテーマにおける3つのカテゴリー設定、そして具体的なトピックを検討する際の時間軸、空間軸設定の問題を取り上げた。ただし、実際のところ、時間軸と空間軸の設定は、別の軸が大きく影響することも指摘しておく必要があるであろう。それは技術開発の進展のプロセスである。時間軸における「現在」とはクロノジカルな意味での「現在」ではなく、現段階での技術レベルにおいて、という含意がある。また、技術開発が急速に進展すれば、空間の設定の問題もこれに応じて変える必要が出てくる。ただし、技術発展のプロセスは、科学的発見や知識だけでなく、社会や文化がいかなる技術を優先的に開発することを求めるかによって異なる。社会的要請や文化的ビジョンが大きく作用するのであり、この点で、宇宙開発技術の発展のプロセスそれ自体も人文科学的研究の対象となり得る。



#### 4. 宇宙人類学—文化人類学から宇宙へのアプローチ

ここで、人文科学の諸分野が宇宙研究に取り組む場合、いかなるトピック、テーマの設定があり得るか、具体的に筆者の専門分野である文化人類学を取り上げて検討してみたい。むしろ、人文科学の諸分野において文化人類学が「宇宙」にアプローチする際にもっとも適した分野ということの意味するのではない。しかし、文化人類学はその学問分野の成立からしても、「宇宙」にアプローチするのに適した分野であると、筆者は考えている。また、前節で述べた人文科学が宇宙にアプローチする場合の3つのカテゴリーそれぞれに対応したテーマ、トピックの設定が可能な分野であるためである。この章では、文化人類学からの宇宙研究における理論的可能性について検討したい。

十九世紀後半に社会学と共に、新たな分野として人文科学に加わった文化人類学は、一般にアジア・アフリカなどの「未開社会」、「前近代社会」を対象とし、フィールドワーク（現地での長期の参与観察）によって、それぞれの文化の論理を明らかにする研究分野と見なされている。

ただし、筆者自身は朝鮮半島を中心とした東アジア地域を主なフィールドとして、近代以降、そして現在のグローバル化が進む状況における社会の再編成の問題、文化のダイナミズムの問題の研究を行っている。また最近の文化人類学は、欧米社会や移民の問題、あるいは医療や災害の問題など、自社会研究も含めた現代社会の多様な問題を取り扱うようになってきており、必ずしも十九世紀や二十世紀前半の人類学者がもっぱら取り扱ってきた「未開社会」や遠く離れた「異文化」を対象とするわけではない。このように人類学者の研究対象が変化してきた背景には、近代化が進展し、地球上のどのような場所でも、閉じた社会でなく、外部と様々な相互関係をもっているようになったことがある。加えて、二十一世紀になり、どのような地域・社会でもグローバリゼーションの問題を考慮しないではいられなくなった現状がある。このような状況の中で文化人類学は個別文化の問題から、文明論や文化間の問題に目を向けざるを得なくなった。

一方で、文化人類学は、対象やテーマが変化してきたものの、調査対象地における長期間の *fieldwork*、それも *participant observation*（参与観察）を主に経験的なデータを収集し、*ethnography*（民族誌）を作成することを基本的な研究アプローチとしてきた。これを本論文の内容に即して言えば、人類学者は長期間の参与観察により、人々の「生活世界」を内側から理解しようと試みる。この意味で、文化人類学が宇宙研究を行うというのはいささか奇異なように思えるかもしれない。すなわち、現段階では人類学者が長期間「宇宙」に滞在する事は想定しにくいであろうし、そもそも宇宙空間には人類がほとんど居住していない、すなわち対象とすべき「社会」や「文化」が存在しないのである。

しかし、長期間の *fieldwork* とそれに基づく *ethnography* の作成のみが文化人類学の学問的な営為ではない。そのように集められたデータや民族誌を基に、異文化の理解を個別の文脈に照らしながら行い、最終的には文化の理論の一般化を試み、「人間の文化とは何か」を考察する事に向かおうとする。この点で、特定の地域に関する情報や知識を集積し、その

地域を理解しようという「地域研究」とは異なっている。

このような文化人類学の方向性には、学問分野として成立した歴史的経緯が大きく影響している。まず、その学問的出発点は、十五世紀から十七世紀までの西欧によるアジア、アフリカ、アメリカ「新大陸」への植民地的な海外進出、いわゆる「大航海時代」にある。ただし、「大航海時代」は英語では「Age of Discovery」ないしは「Age of Exploration」（大発見時代）であり、これは「地理上の発見」にその重点がある。「発見」した地域には先住民がおり、インカ帝国など高度な文明を築き上げている場合もあった。しかし、この時期には、少数の例外を除いて「異文化」をめぐる理解には向かうことはなかった。文字通りの「発見」と「領有」に関心があったのであり、いわば「探索」の延長上に「発見」があったと言えよう。それは「異文化」の発見と理解ではなく、また異文化を含めた「人間」の理解に向かったのでもなかった。これを端的に示す事例が、十五世紀のスペインで行われた「バリヤリッド論争」である。これは1550年に南米の旧インカ帝国の末裔のインディオが野蛮人で先天的な奴隷か、先住民が文明的生活を送っていた異教徒であるかをめぐって争われた論争である<sup>6</sup>。つまり、極端に言えば、インディオが人間であるか、それとも家畜と同じ奴隷であるかの論争であった。

キリスト教的世界観による「異文化」の認識の影響力が強かった十七世紀から、十八世紀を経て、主権国家さらには国民国家の成立と市民社会の形成、産業革命による資本主義の成立を特徴とする近代に入ると、西欧社会から「非西欧社会」に向けるまなざしも変化した。システマチックな植民地支配が開始され、および植民地への西欧人の移住も拡大し、西洋社会と非西洋社会との接触が増えた。ダーウィンの進化論に影響を受けた社会進化主義が流布し、「未開人」は啓蒙主義的思潮から、近代「文明社会」による「未開社会」研究が開始されることになる。

十九世紀の初期近代文化人類学には、十七世紀までにはなかった新しい観点があつた。それは「人間の文化の領域」の拡大である。世界各地からもたらされる文化の報告された様々な「異文化」についての知識の増加は、「人間の文化の領域」の拡大を意味し、それはやがて「異文化の研究」から「人類文化」の研究へと向かうことになる。同時に、ヒューマニズムの思潮の影響を受け、人間と動物を区別し、動物とは区別される「人間」の研究、すなわち「人間学」が成立する。この際に両者を区別する指標の1つが「文化」であつた。人類学はこうした近代の「異文化の発見」と、それによる「人間の文化の領域」の拡大の流れの中で、始まった学問分野である。

大航海時代から引き続く、探検、未知の大陸への知的好奇心を契機とした、文化人類学の歴史的展開は、人類の宇宙進出によってもたらされるであろう文化の課題を検討する上で、奇妙な平行関係にある。十九世紀の文化人類学は、拡大する「人類の文化の領域」を含めた「文化の研究」へと向かい、さらには二十世紀にはレヴィ＝ストロースを代表とする近代文明、西洋思想批判へ向かった。同時に、その研究対象をいわゆる小規模で単純な「未開社会」から複雑な文明社会へと広げ、現代ではグローバリゼーションの中で起こりつつある文化の

商品化や標準化の問題、移民の問題など、文化のダイナミズムについて研究する方向へと向かっている。この文化人類学の展開の過程で、宇宙における文化的問題を考察する上で、2つの重要な概念に着目したい。それは「文化相対主義」と「異文化による異化作用」である。

前者において、近代文化人類学は「文化相対主義」を異文化理解の中心的な視点に置いたことはよく知られている。これは、ある文化に所属する人間にとって、異なる文化に一見理解しがたい奇妙な慣習があっても、「異常」や「未開」あるいは「後進的」と位置づけるのではなく、それぞれの社会の脈絡で理解すべきであるという捉え方である。その際に、個別のこの文化相対主義は自分自身の持つ文化を最高であるとする「自文化中心主義」と対立する概念である。どの文化もそれぞれ所与の環境への最適の適応方法として歴史的に構築されたものであり、すべての文化が固有の価値観を内在しているという捉え方をする。文化人類学はいわば、自民族中心主義を克服する科学的方法論として発展を遂げてきた学問であり、その方法論の基本をなすのが文化的相対主義であった<sup>7</sup>。近年では、この文化相対主義に批判がなされることもあるが、現在でも異文化に臨むときの文化人類学の基本的視点にはこの方法論的視点がある。

この文化人類学的視点、特に文化相対主義の視点は、宇宙に人類が進出した際に発生するであろう、新しい文化を理解する際にも有効であると思われる。宇宙空間という人類にとってまったく新しい未知の環境において、いかなる適応が最適であるかはこれからの課題であるとしても、おそらくその適応のあり方、さらにはその適応によって創造される「宇宙における文化」の問題は、人類の文化に新しい多様性をもたらすと予想される。宇宙への探査、そしてその後の開発・利用の延長上には、宇宙への移住や定住の段階がある。そもそも宇宙船内や宇宙ステーションの内部においても、無重力状況に対する身体的な適応も含めて経験する環境に人類は適応していかなければならないであろう。また、宇宙空間は場合によっては生物工学的な適応も含む新しい適応を必要とする場合もあり得る。このような場合、宇宙空間で新しく生み出された「文化」を理解するためには、宇宙空間における文化について、個々の要素に還元することなく「全体」として理解し、かつ従来の地球の文化の視点からではなく、新しい文化として「相対的」に理解しようという文化人類学のアプローチは有効であろう。

次に後者の「異文化による異化作用」の概念である。人類学の「文化相対主義的」なアプローチに加え、人類の宇宙進出によってもたらされる「人間とは何か」という哲学的な問いをめぐって、人類学における「異化作用」は有効な概念である。かつて「異文化の発見と理解」は、翻って「発見した」西洋社会自身にも基本的な問いをもたらした。つまり、「人間（人類全体）とは何か」「私たちが属している社会、文化とはいかなるものか」、「人類の共通性と多様性はどのような関係になるのか」といった哲学的な課題であり、これはそのまま文化人類学が異文化の研究を通じて自文化に問いかけた課題に接続する。

これに関連し、メルロ＝ポンティは次のように述べている。「人類学のなかで哲学者の関心を惹く点は、人類学が人間の生活や認識の実際の状況のなかで、人間をあるがままにとら

えるというまさにこの点である。人類学に関心をもつ哲学者とは、世界を説明したり構成しようとする哲学者ではなく、存在のうちへと差し込まれた我々のあり方をさらに深く差し込もうとする哲学者である<sup>8</sup>。つまり、人類学者は、「異文化」との遭遇を通して、私たちが認識しないリアリティを生々しく喚起し、対象化しようとする。こうした「異文化との遭遇」がもたらす日常的リアリティの対象化は、自文化の「異化作用」( *Verfremdungseffekt* ) と呼びうるであろう。異化作用とは、ブレヒトがその演劇論で提唱した概念であり、彼によれば「日常とは異なる表現を与え、非日常にいったん意識を落とし込むことによって、かえって日常的リアリティを生々しく喚起させることを目的とした行為」である<sup>9</sup>。ここでの日常生活のリアリティは、本文で言うところの「生活世界」に該当する。こうした異文化が自文化にもたらす「異化作用」を人類学的に実践した代表的な研究者のひとりがレヴィ＝ストロースである。彼は、『悲しき熱帯』、『野生の思考』などの著作で「未開文化」(異文化)との遭遇とその構造についての理解によって自分たちが属する西洋文明を相対化した。いわば「異文化による異化作用」によって、自明のものとされてきた西洋文明の隠れた構造を露わにしたのである。

しかし今日では、グローバリゼーションが世界に浸透するにつれて、世界的規模で文化の標準化が進行している。もはや「新大陸」は存在せず、また私たちとは論理が異なり、場合によっては理解不能な「異文化」がもたらす「異化作用」を望むことは困難になってきている。グローバリゼーションの進行にしたがって、地球は単一のシステムに統合され、「生活世界」が拡張する一方で、人々は「生活世界のリアリティ」を喚起しにくくなっており、漠然とした閉塞感や孤立感に陥っているとしばしば指摘されていることである。

ここで宇宙空間において新しい「文化」が生成された場合、この新しい異文化との遭遇は、私たちの文化・文明に大きな「異化作用」となる可能性がある。「宇宙」という文化空間が私たちの文化、文明にもたらす異化作用は、かつて人類学者が「未開文化」を自文化に紹介することによってもたらし得た「異化作用」よりも、さらに強烈なインパクトになるのではないか。それは私たちが当たり前としてきた「生活世界」の認識を根底から揺るがす可能性を秘めている。この宇宙空間がどのような「異化作用」をもたらすかは、まさに人類学的に議論しうる問題である。



## 5. 宇宙人類学の諸課題

前章では、人類の宇宙進出が、どのような文化の理論的課題をもたらすか、あるいは人文諸科学にとっていかなる基本的課題を提示するかの可能性を、「異文化理解」の学問分野として展開してきた文化人類学の見地から検討した。この章では、宇宙空間が文化人類学において、どのような具体的トピックとなりえるかについて検討したい。「宇宙人類学」が今後取り扱うプロトトピックを列挙するものである。

まず前提として、現在人類が長期間居住することが非常に困難な宇宙空間において、果たして新しい文化が生成されるかどうかという問題がある。確かに現在の技術水準では、人間集団が一定期間以上、宇宙空間に居住するような状況は、短期的には不可能であるかもしれない。しかし、時間的スパンを数十年単位やそれ以上に設定した場合、それは100%あり得ないとは言い難い。これまでも、人類は長いスパンの歴史的プロセスでは、人間の居住限界に挑み、様々な生活適応をし、その生活世界を拡大してきた。その結果、人類は多様な社会・文化を展開したのであり、今日、その多様性こそが「人類の智」となっているのである。

また、現在の宇宙ステーションにおいては、多様な出自をもつ宇宙飛行士達の居住空間が、すでにある種の「多文化状況」といえる状況にある。同時に宇宙ステーションという限定された空間や技術的問題が要請する一種の行動規範が支配している。さらには、宇宙ステーションやスペースシャトルを運用する主体が備えている社会が、衣食住といった日常生活の規範において一種の文化的ヘゲモニーを握っている可能性があることなどを考慮すると、すでに宇宙空間における「文化の問題」が存在すると言えよう。

また、宇宙空間においては、地球上とは異なる時間の感覚、無重力状況において地球上とは異なる空間認識が生み出される可能性がある。さらには身体やその動き、感覚についても直接的、間接的に地球においては想定しにくい変化がある。時間、空間、そして身体は社会や文化の基盤であり、宇宙空間においてその基盤が変化したときに何がもたらされるのかは、文化の問題としても重要である。

ここではやや時間的スパンを広くとり、近い未来人類の宇宙進出が本格化した時に、どのようなトピック、文化的課題を文化人類学が取り扱うことができるのかを検討してみたい。

### (1) 高度知的生命体との出会いによる「人類」の対象化

これは、これまでの文化人類学が「異文化」との遭遇と理解を通して自文化の再検討を行ってきたという点で、オーソドックスなトピックである。おそらく「宇宙人類学」について、「異星人との出会い」「異星人についての人類学的 fieldwork」という一般に想像されがちなトピックである。しかし、あまりにSF的な状況の設定であり、これは「宇宙人類学」のトピックとして可能性はあるものの、主要なトピックとはならない。

### (2) 宇宙環境への適応と新しい文化の生成

今日、サハラ砂漠と周辺のスバンナや極北地域といった過酷な環境に居住する採集狩猟民



のクン・サンやイヌイットは、その環境に適応する過程で独自の社会・文化を創り上げてきた。これらの民族はそうした過酷な環境にもともと居住していたのではなく、クン・サンの場合にはバンツー系集団の拡大を逃れ、またイヌイットは **native American** の侵入によって、豊かなステップ地帯から現在の居住地に移住したという歴史的過程がある。人類はこのように過酷な環境に適した社会や文化を創り上げることによって、適応してきた。宇宙空間においても、地球より遙かに多様性に富んだ環境に適応するような新しい社会や文化が生み出される可能性がある。

### (3) 宇宙空間における身体的適応の問題

むろん重力や宇宙船の問題など、宇宙空間は地球上のどの場所とも比較にならない過酷な環境であり、社会や文化の創出によるだけでは適応できない可能性もある。しかし、その場合には、別の大きな文化的問題が発生するであろう。過酷な宇宙空間に適応するために、バイオテクノロジー（生物工学）や身体の一部の機械化を駆使し、身体そのものを変える可能性がある。現在のところ、宇宙飛行士は地球上に帰還することを前提としており、宇宙空間に適応するために身体そのものを「改造」することは想定しにくい。しかし、宇宙空間に長期間滞在する事による身体的変化が常態化する事態も含め、さらに地球に帰還しないことを前提とした「移住」を想定するならば、生物工学による身体改造も可能性としてある。この場合、そのような身体加工を施した人間は果たして人間と言い得るのか、「人間はどこまでが人間か」といった基本的問いが生まれる。さらに、そのような「改造された」人間を社会が同じ人間として受け入れることが可能か、という文化的問題が想定される。

### (4) 衣食住など基本的な生活文化の問題

衣、食、住といった生活文化は人類の文化において環境条件に規定される部分は大きい。しかし、それがひとたび衣文化、食文化、住文化といった下位文化を構成するに至った場合、むしろ環境条件の既定を越えて生活に影響を与えるのであり、そのような人間の基本的生活要素は、技術や環境から一方的に規定されるのではない。現在の宇宙ステーションにおいては、生活文化は環境というより、技術的な枠組みに規定されている。しかし、宇宙ステーションにおいても、それぞれの宇宙飛行士はもとの生活文化を持ち込んでいる。例えば栄養学的に計算された「宇宙食」においても、それぞれ慣れ親しんだ料理に類似したものが準備されている。一方で、今後、宇宙空間において創り出された新しい「食」が地上に持ち込まれる可能性もある。

### (5) 宇宙進出、宇宙への移住にある文化の影響

宇宙進出や宇宙への移住を促進するのは、科学的探求心や未知の空間への憧れだけではなく、実際のところ、多くの人々は宇宙開発についての科学的重要性や知的冒険心だけでなく、その背後にある宗教的な世界観や社会的エートスが大きく影響している可能性がある。ある

調査によれば、JAXA と大学院生を対象にしたアンケート調査では、宇宙についての関心の方向は似通っており、「宇宙の始まりと終わり」「宇宙での居住」「宇宙空間の解明」「生物やエイリアンの存在」などであり、現実に直結した宇宙の統治、軍事、ビジネスよりも、よりマクロな未知の世界に大きな夢を抱いているという<sup>10</sup>。ただし、このアンケートは JAXA 職員と大学生を対象としており、より広い市民が宇宙についてどのような関心を抱いているかは今後の課題となっている。また、宇宙に対する関心が宇宙開発や宇宙への移住といった現実の行動に直結するかは別のレベルの問題である。そもそもマクロな未知の世界は具体的な既知の世界のアナロジー（類比）で理解された上で、人間は実際の行動を選択する。この場合に宗教に典型的に見られる世界観や宇宙観、それに基づいた価値観、さらには使命感は行動に移す契機の一つである。

### (6) 宇宙開発がもたらす新しい文化や宗教

宇宙研究や宇宙開発の進展は宇宙に対する科学的知識をもたらすだけではない。そのような宇宙に対する知識が文化、宗教に大きな影響を与える問題がある。例えば、New Age Movement は、1960 年代後半の月面着陸など宇宙開発が一つのピークを迎えた後に、1970 年代後半から 1980 年代にアメリカ合衆国の西海岸を中心に活発になった「新宗教運動」である。キリスト教の千年王国思想を基盤としたこの運動は、その後商業化、ファッション化することによって社会に浸透した。この活動の一つに「チャネリング」(channeling)がある。このチャネリングは高次の霊的存在や神と交信するという点で、人類学で言うシャーマニズムに類似しているが、宇宙人がチャネリングの対象である場合もある。

例えば、アカデミー女優のシャーリー・マクレーンの 1980 年代のベストセラー『アウト・オン・ア・リム』は自らのチャネリング体験を書いたもので<sup>11</sup>、映像化までされている。シャーリーがチャネリングしたのは「プレアデス星人」であり、チャネリングの際に彼女は脱魂し、地球の大気圏を脱出し、太陽系を離れ、さらには銀河系を見ることができ宇宙空間に浮遊する。この脱魂は地上から天上への垂直的な魂の上昇という点でキリスト教の「伝統的」世界観に合致するものの、映像では地球、太陽系、銀河系などの様子が天文学の知識に沿って示されている。

また、バシャール運動はオリオン座近くの惑星に住む「エササニ」人とのチャネリングを行うとされ、宇宙人との直接交流が始まる事を予言するニューエイジムーブメントである<sup>12</sup>。これらの運動は、一見したところ近代科学とは無関係に見えるが、その教義や世界観に最新の科学的知識が取り入れられている。こうした異星人とのチャネリングは宇宙開発が宗教や世界観に与えた影響である一方で、これらの宗教運動はその豊富な資金力で宇宙に関する研究を支援し、宇宙開発を促進する動きをしていることは興味深い。

### (7) 宇宙居住地における文化とアイデンティティの問題

このような問題は、これまでは主に SF やコミック、アニメーションにおける題材であっ

た。しかし、そこで描かれる「地球外居住地」はむしろ地球上の現実社会の投影であり、そこにはある種の「文化の連続性」についての認識が見いだされる。例えば、SFにおけるスペースオペラ、コミックやアニメ、例えば「宇宙戦艦ヤマト」、「ガンダム」などにおける地球外居住地（スペースベース、スペースコロニー）は、ハード面ではNASAの宇宙コロニー構想などが援用されているものの、そこで展開される生活空間は、地上と同じように描かれており、リアリティとゲーム性を確保するため、現実の地球上の都市についての知識から踏み出していない。そこで描かれる宇宙都市は二十世紀初頭の近代都市計画に出自があり、現在の世界、国家、都市のコンセプトやリアリティから飛躍しているわけではない。この事は不特定多数の読者や視聴者に基本的に現在の社会・文化を基盤とした発想にとどまる。これは読者を対象とする以上、やむを得ない限界でもある。しかし文化人類学における移民研究が明らかにしてきたように、移民は出身社会・文化を基盤としつつも、新しい生活空間やそこでの社会や文化そのものを人々が造り上げてきた。宇宙空間については、空白地域に多様な人々が移住して、あらたな社会秩序を構築すると同時に、いかに「自分らしさ」を構築するかの問題に直面することになる。

また、移住者は流動的な移動によって、それまでの社会で構築してきたアイデンティティを放棄し、ある種のアイデンティティの解放が起きることがある。一方で、アイデンティティの多様化に抗して、むしろ硬直したアイデンティティを再構築するといった背反する場合もある<sup>13</sup>。宇宙空間においても、宇宙飛行士が「地球人」あるいは「地球の一員」とであるというコメントをする一方で、「日本人」としてのアイデンティティを再確認するコメントが見いだされる。つまり、アイデンティティの複数化と流動化が起きていると言え、これは宇宙の移住者には、より明確に起きうる可能性がある。

#### (8) 私たちの認識の変容をもたらす宇宙空間

空間認識や時間認識は私たちの文化の根底にあり、これを基盤として社会や文化が構築される。また、ランドスケープ（景観についての視覚）やサウンドスケープ（音の景観）などは私たちの生活世界を取り巻き、生活に影響を与えると同時に、私たちが主体的にこれに関与し、変えていくという相互関係がある。しかし、宇宙空間は、そのような認識を変える可能性を持ち、それによって、これを基盤に組み立てられていた社会や文化が根本的に変化することがあり得るであろう。例えば空間認識に関連したトピックを例に挙げてみよう。近代においては、二次元的な地図を書き、読む（リテラシー）能力が養成された。これは現実の空間と二次元的な地図を対応付け、それに基づいて移動し、目的地を探す空間認識能力である。しかし、無重力の宇宙空間では二次元的認識ではなく、三次元的認識が必要であり、近代に養成されたのとは異なる空間についてのリテラシーが要求される。

この他にも、宇宙人類学で取り扱うことのできるトピックは様々に考えられるであろう。例えば、宇宙空間における「公共性」「公共空間」をいかに創出するか、あるいは宇宙空間

におけるコミュニケーションの変容、宇宙における身体技法の変化などの問題である。文化人類学者はこれまで異文化研究において様々なトピックを設定し、それぞれの研究を進めてきた。宇宙人類学においてもそれぞれの知見によって、ここに挙げていない様々なトピックの可能性もある。

日本文化人類学会では、2012年度から「課題別研究懇談会」を設置し、複数の人類学者に横断的な特定のトピックについて、共同研究を進める制度を開始する。「宇宙人類学」はその第一回に選定されたテーマの一つであり、文化人類学者に加え、他の分野の学者もメンバーとして加わっている。上記のトピックの検討、また新しいトピックテーマの設定など、今後、宇宙人類学の可能性が期待される。そこで、次章では、宇宙人類学から現在の宇宙開発、宇宙への進出の問題についてアプローチした時に、具体的にどのような知見を得ることが可能なのか、具体的なトピックを取り上げ、検討してみたい。

## 6. 宇宙観光に関する人類学的試論

この章では、宇宙人類学から宇宙開発、宇宙進出の問題へのアプローチを行った事例として、宇宙観光のトピックを取り上げる。長らく宇宙開発は、ミッションが国家主導で行われてきたという経緯から、まずは科学技術上の成果を中心に進められてきた。厳しいトレーニングを積んだ宇宙飛行士のみが宇宙空間に行く事ができたのであった。

しかし、近年になって宇宙ロケット打ち上げの技術改良が進み、一般市民が宇宙を旅行する可能性が現れ、これをビジネスとする企業が出現するようになった。木下によれば、すでに2007年時点で、スペースアドベンチャー社は5人の民間旅行者を宇宙に送り出したという。そして2011年にソユーズ有人宇宙船による民間人の宇宙旅行を2013年に再開することを発表した。代金3,000万~4,000万ドルの約10日間の宇宙旅行では、旅行者がソユーズ有人宇宙船に搭乗し、国際宇宙ステーション(ISS)を訪問する予定である。また日本のJTBと契約しているヴァージン・ギャラクテック社は、高度100kmのサブオービタル(準軌道)において無重力体験を企画運営している。その費用は20万ドルである。航空機を使った無重力体験ツアーは厳密には宇宙旅行とは言えないものの、約5,000ドルと海外旅行なみの費用である。このような多様な「宇宙旅行」が民間ベースで進められているだけでなく、宇宙エレベーターや宇宙ホテル計画などまで具体的に検討されている。

JTBのwebサイトにはJTB宇宙旅行のページで宇宙体験旅行の募集がある。そこには次のような案内文がある。「地球の大気圏を離れ、宇宙空間を体験する旅です。みなさまを乗せた宇宙船は音速の3倍以上のスピードで高度100kmへと急上昇。無重力状態でしばし宇宙に滞在することになります。頭上には果てしない宇宙空間が、眼下には丸みを帯びた地球が広がります。上昇時と降下時に大きなG(重力)がかかりますが、およそ5分間の滞在時間中は無重力状態となります。無重力に身をまかせ、宇宙の奥深さを心ゆくまで味わいましょう。」<sup>14</sup>

宇宙旅行のガイドブックに関しては2005年に発行された英語の宇宙旅行ガイドブック(Anderson, E & Piven, J)<sup>15</sup>があり、その翌年に小林淳子の訳で日本語訳が出版されるなど、2005年以降英語や日本語で様々なものが出版されてきた。また2006年には福江純編集の『宇宙旅行ガイドブックー140億光年の旅』<sup>16</sup>が出版されるなど、この前後に日本においても「宇宙旅行」というものが現実的な旅行の一つになった事を示している。

こうした民間の宇宙旅行については、経済活動の一つとして捉えることもできるであろう。また宇宙旅行は人々の世界観、宇宙観、歴史観・国家感、さらには人類の意識にさまざまな変化をもたらす可能性があるという指摘がある<sup>i</sup>。

ここでは文化人類学のサブジャンルの一つである「観光人類学」の観点から、この宇宙旅行を検討してみよう。なぜならば、民間の宇宙旅行が国家や研究機関のプロジェクトと異なる最大の点は、それが「観光(tourism)」と不可分である点にある。

---

<sup>i</sup>木下 2009:293-294



例えば、前述した『宇宙旅行ガイドブック』の著者の福江純は、宇宙物理学を専門とする研究者である。この著書はその時点の最新科学に基づいて書かれている。このように宇宙旅行あるいは宇宙滞在（居住）のガイドブックを専門家が執筆している場合は、可能な限り正確な科学知識に基づいて、宇宙に関する知識を伝え、宇宙旅行について説明しようとする姿勢が見いだされる<sup>17</sup>。またケンプの『Destination Space –how space tourism is making science fiction a reality』（邦題訳は『そうだ、宇宙へ行こう –2000 万円であなたも宇宙に！』）とあたかもツアー旅行のパンフレットのようなタイトルである<sup>18</sup>。ただし、その内容は、フィクション仕立てであっても宇宙旅行のリアルな様子を描写し、宇宙空間における様々な問題、民間の宇宙旅行にいたる歴史的プロセスを詳細に記述している。これらは宇宙空間についての科学的入門書、あるいは宇宙旅行についてのルポルタージュであり、一般的な意味での「観光ガイドブック」ではない。

ただし、前述した『宇宙旅行』についての出版社／著者からの説明においては、次のようなキャッチコピーが書かれている。「宇宙の歩き方を、最新情報にもとづき第一線の研究者が書き下ろす旅行ガイドブック。人類が最後に旅するだろうフロンティア、宇宙を正真正銘ありのままに紹介する。宇宙旅行者になったつもりで、知的探索の旅へ。」そして、書籍に関するデータベースには「いつの日か必ず訪れてみたい名所や旧跡をリストアップ。最近発見された新名所や、観光コースからは外したい危険地帯なども網羅。」とあり<sup>19</sup>、これはいわゆるアマゾンや南極などの「秘境ツアー」と呼ばれる観光旅行のキャッチコピーと同じ表現と言えよう。

さらには2005年に発売された『宇宙の歩き方』は出版社が異なるものの、格安海外旅行のガイドブックとして広く知られている『地球の歩き方』の宇宙版である。この『宇宙の歩き方』には明らかに観光としての「宇宙旅行」のガイドブックとしての特徴が明確に表れている<sup>20</sup>。その構成は、「宇宙旅行の基礎知識」、「旅の準備」「モデルコースの紹介」からはじまり、3つのモデルコース（「地上で無重力体験」「高度100 kmの宇宙へ サブオービタル飛行」「軌道上の宇宙ステーションへ オービタル飛行」）について、「ツアー概要」、「ツアー詳細」「見どころと楽しみ方」といった項目がある。さらに月や火星などについては、それぞれの見どころが写真とセットで説明が加えられている。例えば、月の見どころは「100万年残る足跡（アームストロング船長の月面第一歩の足跡）」「たなびかない旗」「月面ローバーでドライブ」といった「見どころ」があげられている。

こうしたガイドブックは少数ではあるかもしれないが、宇宙旅行が地上での観光旅行と同じジャンル、もしくは延長上にあり、「宇宙観光」として受け止められている事を示していると言えよう。

ここで観光人類学の知見を用いて、こうした「宇宙観光」の特徴について検討してみよう。まず指摘しなければならないのは、観光という旅行の形態は近代の現象であるという点である。慰安や娯楽を求める大衆的な観光は19世紀以降に、交通技術の発達と産業革命によるライフスタイルの変化に応じて誕生する。この観光という現象の研究は、1995年に公刊さ

れたアーリのパイオニア的な研究以降、文化人類学、社会学において急速に進んだ<sup>21</sup>。アーリはその著作の第一章で様々な「観光」に共通する特質を9点取り上げている。その中で、宇宙観光について考える上でも重要な指摘がある。

まず、旅は住居とか労働のある場の外の風景へと向かうのであり、滞在はそこに留まることであるのだが、その滞在は短期で一時的であるという性格をもつ、という指摘である。そこには「比較的短い時間」がたてば「家」(home)にもどる、という明確な意図がある。つまり、観光旅行は最終的には「家」に戻るものであり、それは長期の滞在、あるいはそこへの移住には連続しないという点である。

次に注目されるのは、観光の対象に向けられる「まなざし」(perspective)の指摘である。観光地においてはさまざまな場が「まなざし」を向ける場所として選ばれるが、選ばれる理由は、特に夢想とか空想を通して、自分が習慣的に取り囲まれているものとは異なった尺度、あるいは異なった意味を伴うようなものへの強烈な楽しみの期待である、とアーリは指摘する。そして、このような期待は映画やテレビ、雑誌などのメディアによって作り上げ、支えられており、これらがまなざしを造り強化しているという。例えば『宇宙の歩き方』における「見どころ」の選択はメディアのイメージによって作られた「まなざし」が向けた場所であり、そのまなざしは宇宙についての科学的知識とは異なるメディアの活動によって作られているのである。

アーリは、さらに観光のまなざしの再生産についての重要な指摘をしている。観光のまなざしは日常体験から区分されるような風景に向けられるのであり、しかも写真や絵はがきや映画や模型を通して、視覚的に対象化され、把握されていき、はてしなく再生産され、再把握を繰り返す。宇宙観光においても、旅行者があらかじめ映像などで対象化、把握した風景をさらに再生産し、再把握するのであるならば、それは認識の変化にはつなげていかない。

そしてもっとも重要な指摘と思われるのは、「まなざしが記号を通して構築され、観光は記号の集積である」という点である。そもそも、観光という行為が成り立つためには、目的地についてのイメージが組織的に生産され、供給されていなければならない。観光客がガイドブックを読んで宇宙旅行に出て、ガイドブックに載っているのと同じ場所に行き、同じような映像を撮ったならば、そこで「経験」されているのは、宇宙についてあらかじめ旅行に行く前に与えられたイメージや記号の再確認もしくは消費であり、ある種の疑似イベントに過ぎないことになってしまう。

このアーリの観光研究は、その後実際に文化人類学が地球上の様々な観光現象について調査研究を進め、より精緻な考察がなされており、彼の基本的な指摘は大半の人類学者が首肯するところとなっている。とするならば、宇宙観光旅行によって、私たちが得るのは、宇宙空間について地上で構築されたイメージの再確認と記号の消費にすぎない。したがって、人々の世界観、宇宙観、歴史観、国家観、さらには人類の意識変化にさまざまな変化をもたらすような認識の変化にはならない可能性がある。

さらに言えば、宇宙観光は、それがそのまま「宇宙移民」へとは連続しない可能性がある。

観光の延長上で宇宙空間に中長期の滞在が行われることはあっても、それはいわゆる快適で安全な空間、一時的な滞在地としての「宇宙リゾート」となる。これはアマゾンや極地に赴く「秘境ツアー」の連続線上にあり、「顧客」は地球上と同じような快適な空間を求めよう。「宇宙リゾート」は、人類の新たな生活世界の拡大とは言い難く、宇宙という未知の空間に新しい生活空間を造り上げることが求められる「宇宙移民」とは異なっている。「宇宙移民」を想定したときに、人々は単なる好奇心を満たすこと、あるいは新奇な体験をすることを超えて、宇宙空間に関する深く広い知識を持つことが要求される。

ここでは簡単な試論として観光人類学の見地から宇宙観光の問題を一つの試みとして行ってみたが、現在の観光人類学の知見をもってより詳細に検討するならば、宇宙観光が宇宙進出ではなく、また本論文の前半で論じたような宇宙空間への進出がもたらす新しい文化の生成につながるのではないことなどが明らかになる。

また今日では観光という現象はグローバリゼーションと密接に関わっているのである。アマゾンや極地に一般の旅行者がツアーで行くことが可能になったのは、グローバリゼーションの産物であろう。現段階では宇宙観光はこれらの秘境ツアーの延長上にある。以上、異文化を対象としてきた文化人類学的アプローチや概念を宇宙開発への進出、移住に適用すると新たな問題が見えてくる例として検討を試みた。

## 7. おわりに

本論文で議論したように、宇宙空間とそこへの進出、移住は文化人類学だけでなく人文科学のあらたな可能性を開きうる刺激的なフィールドである。近代のアカデミズムにおいて、自然科学と人文科学が分化し、さらにそれぞれの領域における分野の細分化の結果、対話や協力が困難になっていることは事実であろう。しかし、宇宙という人類がまったく未知のフィールドに望むとき、そのような区分され、細分化した領域や分野が個別では検討できない課題が多く現れることであろう。本論文では差しあたり、文化人類学が宇宙研究においてどのようなトピックを扱えるかの試論を行い、具体的に第4章では取り扱うことのできるいくつかのトピックを挙げ、また第5章では観光人類学の視点から宇宙旅行の問題を試みに論じてみた。ただし、本論文はあくまでもアイデアの提示のレベルにとどまっていることをお断りせねばならない。それぞれのトピックをより深く議論するためには、隣接諸分野にのみならず、自然科学との対話、協力が必要となることは言うまでもない。今後「宇宙人類学」を基盤に、そうした学際的な研究を行っていきたいと考えている。

**【謝辞】**

この論文の多くの内容は、宇宙総合学ユニットのワークショップ、シンポジウム、ISTS パネルディスカッション「宇宙時代の人間・文化・社会」そして JAXA きぼうフォーラム 研究会「宇宙生存学研究会」での講演あるいは議論から多くの発想をいただいております。2年前には宇宙人類学といった発想がまったくなかった私を「未知の新しい可能性」に導いて下さった磯部洋明さんに心からの感謝を申し上げます。また、第3回宇宙総合学 unit シンポジウムでは、宇宙に関する人文社会的研究の大先達である木下富雄先生からは厳しくも暖かい励ましをいただきました。ここに御礼申し上げます。

2011年3月11日に東日本大震災が起これ、多くの方々が尊い命をなくされました。未だ復興の見通しも開けていない被災地で感じた事は、我々にはつねに新しいユートピアと具体的なビジョンが必要であるということです。宇宙空間を考えるということは、直接には行くことができないものの間接的にそうしたユートピアの存在を信じることであり、そうした生きる力を被災地の方々からいただいた気がします。また、微力ながら文化人類学者の立場から被災地の緊急調査などに加わったために、体調を崩してしまい、論文執筆に際しては JAXA 人文・社会科学コーディネータの岩田陽子さんには、たいへんなご迷惑をおかけいたしました。ここに深くお詫びすると共に、心からの感謝を申し上げます。

**【参考文献】**

- <sup>1</sup> フッサール（細谷恒夫・木田元訳）『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中公文庫，1995.
- <sup>2</sup> 滝澤邦彦「宇宙開発」西川長夫，大空博，姫岡俊子，夏剛『グローバル化を読み解く 88 のキーワード』平凡社，2003:33-35 頁.
- <sup>3</sup> 木下富雄編『宇宙問題への人文・社会科学からのアプローチ』国際高等研究所+宇宙航空研究開発機構，2009.
- <sup>4</sup> 木下富雄 前出 2009:65 頁.
- <sup>5</sup> 滝澤前出
- <sup>6</sup> 染田秀藤・篠原愛人監修『ラテンアメリカの歴史 史料から読み解く植民地時代』世界思想社，2005. およびラス・カサス(染田秀藤訳)『インディアスの破壊についての簡潔な報告』岩波書店，1976 参照.
- <sup>7</sup> 江渕一公「文化相対主義」石川栄吉他編『文化人類学事典』弘文堂，1987:687 頁.
- <sup>8</sup> メルロ＝ポンティ（谷徹訳）『シーニュ』みすず書房，1993:594 頁.
- <sup>9</sup> ブレヒト（千田是也訳）『今日の世界は演劇によって再現できるかーブレヒト演劇論集』白水社，1962. および岩淵達治『ブレヒト 人と思想』清水書院，1980 を参照.
- <sup>10</sup> 木下富雄前出 2009:65 頁.
- <sup>11</sup> シャーリー・マクレーン（山川紘矢，山川亜希子訳）『アウト・オン・ア・リム』角川文庫，1999.
- <sup>12</sup> ダリル・アンカ（大空夢湧子訳）『BASHAR2006(バシヤール 2006)ーバシヤールが語る魂のブループリント』ヴォイス社，2006.
- <sup>13</sup> 宮永國子『グローバル化とアイデンティティ』世界思想社，2000.
- <sup>14</sup> <http://www.jtb.co.jp/space/suborbital.asp>
- <sup>15</sup> Anderson, E & Piven, J 『*The space tourist's handbook: Where to go, what to see, and how to prepare for the ride of your life*』 Quirk Books, 2005.



- <sup>16</sup> 福江純責任編集, パリティ編集委員会編『宇宙旅行ガイドブックー140億光年の旅』丸善出版, 2005:33頁, 1行目.
- <sup>17</sup> 例えば, 岩田勉著, 宇宙航空研究開発機構編『人類が宇宙に住む』丸善プラネット株式会社, 2006, カミンズ・F, ニール『もしも宇宙を旅したらー地球に無事帰還するための手引き』Softbank Creative, 2008など.
- <sup>18</sup> ケニー・ケンプ (菊池由美訳)『そうだ、宇宙へ行こうー2000万円であなとも宇宙に!』阪急コミュニケーションズ, 2009.
- <sup>19</sup> <http://www.amazon.co.jp/>
- <sup>20</sup> 林公代『宇宙の歩き方』ランダムハウス講談社, 2005. なお, 日本のバックパッカーにとって海外旅行のバイブルと言われた『地球の歩き方』は, 『地球の歩き方』編集室編, ダイアモンド・ビッケ社発行である.
- <sup>21</sup> ジョン・アーリ (加太宏邦訳)『観光のまなざし』法政大学出版局, 1995. なお, アーリの観光研究のその後の発展については (吉原直樹・大沢善信監訳)『場所を消費する』法政大学出版, 2003も邦訳されている. また, 山下晋司編『観光人類学』, 新曜社, 1996. 山下晋司『観光人類学の挑戦ー「新しい地球」の生き方』2009. 橋本和也『観光人類学の戦略ー文化の売り方・売られ方』世界思想社, 1999. などを参考にした.

## 講評

小山 勝二 京都大学 名誉教授

ある新聞社から「古代日本人の宇宙観について」の寄稿を頼まれた。例えば古代インドの巨大亀の甲羅に支えられた宇宙観、あえて言えばこれは、自然科学、社会・人文科学、民族の伝統思想や宗教までも融合したものであったのだろう。こんな宇宙観が古代日本に育っていたか？ 答えは残念ながらノーであろう。古代日本人にはそのように宇宙について総合的に考察する DNA がなかったのか。現在、宇宙からすべてが離脱し自然科学のみが残った。そして宇宙科学の分野で日本は世界のトップクラスになった。でも何か満ち足りないものを感じるのはなぜだろう。

本論文はそのような現代的状況のなかで、人文科学の宇宙への復帰、復権をめざそうとする問題意識に基づいている。人類が宇宙へフロンチアを広げようとする現在こそ、その宇宙への復権の時機といえるだろう。筆者は宇宙空間を人文科学的な意味で「生活世界」と位置づけ、生活世界の延長、改変、創造という視点で問題を整理、提起している。ただし筆者も認めるように、本論文は問題提起、すなわちアイディアの提示のレベルを超えるものではない。それぞれのトピックスを掘り下げ、意義ある科学に育てるプロセスは自然科学を含め学際融合的にすすめるのが有効であろう。私達の「宇宙総合学研究ユニット」の趣旨でもある。未開の地、宇宙の科学がその先駆けになればと思う。